

自伝の眞実とエクリチュールの虚構

—スタンダールの「父」をめぐる—

柏 木 治

I

自伝を残した作家に対するアプローチは、多くの場合、その自伝を不可欠の資料とする点で、しかもとくにその幼年期の経験を重視する点で少なからず精神分析的である。何よりも先ず自伝が作家研究の第一級の資料とみなされるのは、自伝の本質的構成要素として、「眞実」を描く、という一般的了解があるからであろう。しかしながら自伝におけるこの自明とも思われる「眞実」性は、実はそれほど容易に了解できる問題ではない。著者が明らかに読者を事実に騙すような場合は論外としても（そのような自伝は自伝の小説ではあり得ても、純粹の意味で自伝ではない）、「眞実」を述べつつ、なおそこに虚構が忍び込む契機は多分に残されているからである。研究者、もしくは批評家が対象としてある作家に向かう以前に、作家自身が対象としての自分に向かいあっているのであって、研究者＝批評家は自伝にかかれた作家とそれを書く作家その人——しかもこの両者は共に彼の対象とする一作家である——のあいだを往き来しつつ分析するという困難に立ち合わされることになる。「仮に私の父が生きていたら、彼は私の上に長々と身を横たえ、私を圧潰していたことだろう。幸いにも彼は若死した。それぞれ自らのアンキーセースを背負ったアエネイアースどもの中で、私は岸から岸へとわたっていった。たった一人で、しかも生涯息子に馬乗りになっているこれら姿なき父親たちを憎みながら。私はひとりの若い死人を置き去りにしてきたのだ。私の父となる暇がなく、今日ならば私の息子であってもおかしくはない若い死人を。」¹⁾ と言い、最後に「(…) 私はひとりの優れた精神

1) Jean-Paul Sartre, *Les Mots*, Gallimard, 1964, p. 11.

分析学者の診断に喜んで同意する。つまり私には超自我がないのだ。」²⁾ とつけ加えられる場合、例えばこの作家の世界を、「価値としての、そして現実としての父性が現実に存在することをやめた世界である。それは人間が……の息子として自己をあくまで選択しようとし、従ってまた息子としての自己を拒絶し得る世界である」³⁾ と論評することは比較的容易であって、むしろ重要なのは、作家がフロイトを援用して《超自我》をもたぬことをことさらに明言していることの意味を問うことであろう。

自伝はつねにわれわれに重層的な読解を迫るが、その重層性の中に潜む作為——事実的な虚構は実証的研究がこれを明るみに出してくれるだろう——をこそ読みとらねばならない。本稿の意図は、おおかたの自伝と同じく父性が根本的に重要なテーマとなっているスタンダールの自伝を媒介にして、そうした非事実的虚構、すなわち「真実」のうちに宿る作家の作為を検討し、自伝と小説との関わりを考える手掛りを示すことにある。

II

既にこれまで幾度となく指摘されてきた特徴として、『アンリ・ブリュラルの生涯』における父親敵視、およびその反作用としての母親との親密な関係をまずあげることができる。ごく表層的に見れば、この関係は容易にフロイト派の精神分析にいう《エディプス・コンプレックス》の概念と結び合うかにも見えるけれども、スタンダールにあってはこのエディプス的構図があまりに顕著に描かれているが故に、かえってそうした概念の適用そのものに疑念を生じせしめることも事実である。《エディプス》なる、甚だ簡便ではあるが、それだけに問題の多いこの概念自体の当否は問わぬこととして、また精神分析が本来的に孕む還元主義的な思考を問題の俎上に載せることは避けた上で、なおかつスタンダールと《エディプス》的状況とのあいだには微妙な問題が残るのである。すなわちG・ジュネットも指摘

2) *Ibid.*, p. 11.

3) Gabriel Marcel, *Mystère de l'être*, Paris, 1951, p. 215. もっとも、このマルセルの指摘は *Let Mots* 発表以前になされたものである。

しているように、精神分析的アプローチがこの作家に対してことさら困難と思われるのは、この作家が母を情熱的に愛し、父を極端なまでに憎んでいることを明言しているという事実それ自体によってなのだ。⁴⁾ 不謹慎かつ破廉恥に自己をさらけ出すことが自己を隠すための最もよい方法である、というエゴチズムのパラドックス⁵⁾——精神分析的アプローチにとってこのパラドックスはつねにひとつの罫であって、あたかも解釈のレベルを始めから韜晦し、精神分析それ自体に抵抗しようという意図に裏打ちされているかのようである。従って、問題はむしろブリュラルを《エディプス》的状况から解放し、先ず何故かくも執拗に父に対する敵意を明らかに書くのかを問うことであろう。表現のレベルからみても、例えば、「私の父は極右王党派になって破産し、1819年だと思いが (je crois) 死んだ。」⁶⁾、あるいは、「ジョゼフ・シェリュバン・ベール、高等法院の弁護士、極右王党派でレジョン・ドヌール勲章勲五等、グルノーブル市助役、1819年死亡、歳は72歳だった、という (dit-on)。だから彼は 1747年に生まれたものと考えられる (suppose)。」⁷⁾ といった言表の je crois や suppose は明らかに意識的ではないだろうか。多くの場合、不明な箇所には詳細を調べる旨をノートして残す習慣のあったスタンダールにあって、自分の父の死亡年を、思込みによって間違えるというのではなく、あたかも全く興味のない他人事でもあるかのように断定を避けるこの言い方は無意識的とは考えにくい。M・クルーゼは、スタンダールが影響を蒙った

4) Gérard Genette, *Figures II*, Seuil, 1969, p. 158. なおスタンダールがいかに母を熱愛しているかを明言している箇所は、例えば、*Vie de Henry Brulard, Œuvres intimes*, t. II, 《Bibliothèque de la Pléiade》, Gallimard, 1982, p. 556.

5) G. Genette, *op. cit.*, p. 157. なお、この点については Michel Crouzet, *La vie de Henry Brulard, ou l'enfance de la révolte*, José Corti, 1982, p. 14. も参照のこと。

6) *Vie de Henry Brulard*, p. 541.

7) *Ibid.*, p. 595.

作家・哲学者を「父の敵視」という系譜の視座から歴史的に追うことによって、この時代（例えばヴォーヴナルグ、エルヴェシウス、デスチュット・ド・トラシー等）の父親殺し＝弑逆者のテーマは無意識のレヴェルで捉えられるべきではなく、全く意識的かつ理性的な方法的反抗であるとしている⁸⁾が、まさしく『アンリ・ブリュラル』の父への憎悪は徹底して意識的に書かれていると考えるべきである。この自伝にあらわれるこうした父親嫌悪は、第一に、その夥しい数によって「父」という存在が作家にとって本質的なテーマであり、第二に、その必要以上とも思われる明示的表現の執拗さによってある方法論的な虚構性を暗示しているといえるだろう。

ところで父親シェリュバンに対するこの呪咀が極めて意識的に書かれているが故にこそ、スタンダールの父親に対する意識をその実相において理解するには、自伝では激しい嫌悪のトーンにかき消されている、父親否定とは逆の動きのあったことを見逃してはならない。「父についていえば、私が望んでいたことはひとつである。彼のそばに近づかぬこと。私は良心の苛責を感じつつ、自分が彼に一滴の優しさも愛情ももっていないことに気がついた。だから自分はひとでなし（monstre）なのだと考えたものだ。この非難に対する答えを長年私は見出してはいない。」⁹⁾と言う時、作家は、自らの父を憎み、あるいは憎んで来たことに対する《remords》を訴え、かつ自分が父親を愛せない《monstre》となることへの一抹の危惧を表明しているのである。ところでスタンダールの書き物にあって、この《monstre》の一語は、父親に対する感情を考える際、見落すことのできないキーワードでもある。『ある旅行者の手記』の序文においても、ナレーションを託された鉄商人（この商人は著者と数多く共通点をもっている）は言う、「正直言って自分の父を全く愛していなかったと言わざるを得ないのだから、私は自分が人でなし（monstre）ではないかと思っていた」。¹⁰⁾いずれの文

8) M. Crouzet, *op. cit.*, pp. 19-20.

9) *Vie de Henry Brulard*, p. 771.

10) *Mémoires d'un Touriste*, t. I. *Œuvres complètes*, cercle du Bibliophile, p. 5.

脈においても父親への敵視は明白であるが、問題が現実の父親を離れ、父親を愛さないことへの一般的な倫理上の問題へと移行している。すなわち現実の父への激しい攻撃の背後にはつねに倫理的次元での罪悪意識に浸蝕されたスタンダールを見出すことができるのである。こうした二重性は比較的早い時期からすでに認められ、例えばシェイクスピアの『リア王』を読みながら書かれた1803年のノートには「父親に対して払うべき敬意に欠けるものはありとあらゆる罪に値する」¹¹⁾と記されている。

小説作品においてもこの点は指摘し得るのであって、ファブリスは父の死を獄中で知り、自分が全く父を愛していなかったことを考えて「自分は偽善家ではないだろうか」¹²⁾と自問する。さらにジュリアンに至っては、自分を実の父ソレルの子供ではないと仮定することによって、《monstre》であることの罪悪感の呪縛から逃れようとするのである（「自分はあの恐ろしいナポレオンに郷里の山中へ追放された大貴族か何かの庶子だというのが、本当にそんなことがあり得るだろうか、と彼は考えた。この考えは時を追うごとにそう不自然でもないように思われてくるのであった……。父に対する憎悪がその証しなのかも知らない……。だとすれば自分はもはやひとでなし（monstre）ではあるまい。」¹³⁾）。

11) *Journal littéraire*, t. I. *Œuvres complètes*, cercle du Bibliophile, p. 253.

12) *La Chartreuse de Parme, Romans et nouvelles*, t. II, 《Bibliothèque de la Pléiade》, Gallimard, 1952, p. 356. なお、実際の父親に対するスタンダールの感情があらわれている例として、*Journal littéraire*, t. I. pp. 123-124. また父と自分との共通点を見い出そうとする態度については、Philippe Berthier, *Stendhal et la sainte famille*, Droz, 1983, p. 61. を参照のこと。

13) *Le Rouge et le Noir, Romans et nouvelles*, t. I. 《Bibliothèque de la Pléiade》, Gallimard, 1952, p. 641. 自分を実際の父の子供ではないと考える態度は、小説作品においてはファブリスの出生に暗示的に示されているが、スタンダール自身、自らについて次のように書いている；「ある日、こんなことを思った。実のところ、それは中央学校以前だったが、——自分は大貴族の息子ではないだろうか。」*Vie de Henry Brulard*, p. 777.

悪い父親と父を愛さない悪い息子——スタンダールの世界に類出する父と子の対立関係は互いにネガティブな価値を負わされた対立関係として浮かびあがるのであって、決して一方的な否定の上になり立っているのではないことを看過してはならないだろう。さらにまた、互いに映し合う鏡のように、父の有罪性はそのままそれを感じる自己の有罪性として自己の内面へと送り返されるが故に自己省察もしくは自己反省を促すことになるのであって、この点で『アンリ・ブリュラル』に述べられている自伝執筆の根本的動機と深く響き合うのである。言うまでもなくこの動機とは「私は何者であったのか、陽気か陰気か、機知の人か馬鹿か、勇気ある人間か臆病者か、……」といった一群の「自己とは何か」という質問形式である。¹⁴⁾ 父との関係に問題を絞るかぎり、こうした質問形式は、「父に対して罪人であったか否か」という問いに読みかえることができるだろう。先に述べたキーワードとしての《monstre》にしても、これがいかにスタンダールの内奥に根差している言葉であるかは、彼が幼少時より実際にこの言葉を父やその取巻きに対して発し、同時に彼自身もまたこの言葉によって非難されたことを、すでに1833年の自伝的断片《Mémoires de Henri B》に記されていることから察しがつく（「週に二、三度私は低い声で《ひとでなし（Monstres）！ひとでなし！ひとでなし！》と繰り返しつつ一時間過ごしたのであった。」¹⁵⁾ 「私は見張られ、ふいに捕えられ、ひとでなし（monstre）という言葉に浴びせられた。」¹⁶⁾）。

以上のように、スタンダールの内には、父親を激しく非難しながらも、そうする自己に対する倫理的な眼差しがつねに読みとれるのであって、それ故にこそ、あまりに赤裸に、かつ鮮明に描かれすぎている、『アンリ・ブリュラル』における父＝子の敵対関係の小説的虚構性を考えてみたくなるのである。

14) *Vie de Henry Brulard*, p. 533.

15) *Œuvres intimes*, t. II, p. 975.

16) *Ibid.*, p. 975.

III

父の死の年を「1819年だったと思うが……」と書くその表現自体に、読者に対してむしろその虚構性を感じさせる何かがあること、従ってまた、この自伝の父＝子の関係を中核にして書かれる部分については多少とも小説的虚構への意図がかなり働いているように思われることは既に述べたが、言うまでもなくこの虚構性とは、実証的検証が明らかにしてくれるところの、書かれた内容と現実にあったものとのズレや食違いをいっているのではない。（そうした現実の歪曲は実際にこの作品中のいたるところにあるし、単なる記憶違いも少なからずある。）つまり、内容そのものを小説的につくり変えるというのではなく、表現レヴェルにおいて意識的に小説的配列および装飾が加えられるということである。後にみるように、この作品において抽出される父シェリュバンと息子アンリの敵対関係は、その周囲の人物たちを巻き込みつつ実に小説的に配置されている（もちろんその書き方において）。確かにスタンダールはこの作品を書く過程で幾度となく嘘を書かぬよう、あるいは小説を書いてしまうことのないよう自戒し、そして自らの偉大な先達であるルソーを引き合いに出してこれを批判している。「私の意図に反して、J.J・ルソーのように技巧で嘘を言うてはいけなから、この一節はおそらく再読し、修正しなければならぬまい。」¹⁷⁾ もちろんルソーは嘘を言ったわけではなく、逆に何度も真実を書いていることを明言しているのであるが、¹⁸⁾ ちょうどこのルソーがモンテー

17) *Vie de Henry Brulard*, p. 935.

18) 「最後の審判のラッパは好きな時に鳴るがいい。私はこの本を手にとって最高の審判者の前に出ていこう。私は高らかにこう言おう——これが私のしたこと、私の考えたこと、私の真の姿です。善いことも悪いことも、同じように率直に申しました。悪いことは何ひとつ隠していませんし、善いことも何ひとつ付け加えてはしません。」Jean-Jacques Rousseau, *Les confessions, Œuvres complètes*, 《Bibliothèque de la Pléiade》, Gallimard, 1959, t. I, p. 5. 「例のない真実さで独特の本を書くことに決めた。（…）私が何ひとつ隠さず欠点を語っても、ありのままの自分を示すことはかえって私の得になるはずだ。」*Ibid.*, p. 523.

ニュの「偽りの無邪気さ」を笑ったように¹⁹⁾、スタンダールの耳にはルソーの『告白』が嘘言に響くのである。²⁰⁾しかしながらよく知られているように、『アンリ・ブリュラル』の冒頭、ジャンニコロの丘からの眺めという設定の中にすでに明らかな作為があることを考えれば、むしろ小説 (fiction) を書くスタンダールと自伝を書く (自伝が真実をありのままにかくことを前提として) スタンダールがいかに融合しているかを探ることにより深い意味があると考えべきだろう。

まずこの自伝のプランにはタイトルとして「本人自身によって書かれたアンリ・ブリュラルの生涯。『ウェイクフィールドの牧師』を模した小説」²¹⁾と記されている。小説 (roman) という語は、このプランには合わせて七回出てくるが、この語に注意を払う必要があろう。これまでも指摘されているように、このタイトルは、第一に警察の目を韜晦する意図を、第二に韜晦に対するスタンダール独自のユーモア・センスをそこに読みとるべきであり、²²⁾ 実際作品中で「(...) おお、わが読者よ、悪い点はすべてつぎの五文字——B. R. U. L. A. R. D. にある。これが私の名であり、私の自己愛を刺激するものだ。もしベルナルと書いたとすれば、この書物はもはや『ウェイクフィールドの牧師』(無邪気さで私の好敵手) のように、ただ一人称で書かれた小説にすぎなくなるであろう。」²³⁾と記さ

19) 「彼(モンテーニュ)は自分の欠点を白状するふりをしながら、ただ好ましい欠点しか自分に認めないよう細心の注意を払っている。」*Ibid.*, p. 523.

20) もっとも、スタンダールのルソー批判は主として文体に集中するので、この点をもう少し考える必要があろう。スタンダールとルソーの言語に対する考え方の相異は仮説的ながら既に論じた(拙稿「自己をめぐるエクリチュールと言語の問題」。「%」, 幻想社, 創刊号に掲載予定)。

21) *Œuvres intimes*, t. II, pp. 961-963.

22) Henri Martineau, *Œuvre de Stendhal*, Albin Michel, 1951.

23) *Vie de Henry Brulard*, p. 807. なお、Brulard が五文字とされているのは、明らかにスタンダールが自身の名である Beyle を念頭に置いていたことからくる誤りである。Cf. *Œuvres intimes*, t. II, p. 1473.

れているところからみて、『アンリ・ブリュラル』が「小説」であることは否定されている。しかし、このタイトルを書いた時点でスタンダールの頭には、何がしかの小説的構成——語るべき内容は真実であっても、その語り方において——があったのではないか。²⁴⁾ この自伝がその直前に放棄された『リュシアン・ルーヴェン』と緊密な関係を保ち、この未完の小説を書く筆の勢いがそのまま『アンリ・ブリュラル』の中にもちこまれたとも推測され得るからである。自伝的小断片は1831年から、33年、37年と見出され、この間に書き始められたきわめて自伝的要素の濃い『リュシアン・ルーヴェン』を1835年11月に中断して『アンリ・ブリュラル』に着手し、さらにこれを放棄したのち再び『リュシアン・ルーヴェン』に手を入れている、というクロノロジックな観点からしても、この時期がスタンダールにとって「自己」に最も関心のあった期間だといえる。さらに本稿の論旨から考えてとくに強調しておくべきは、この未完小説と自伝とが共に同じ問題意識によって書かれていることである。すなわち「父」と「子」の問題をめぐるそれであって、リュシアンもブリュラルも共に「私は何者なのか」という根本問題を問うのである。²⁵⁾ 「もしこれ（『リュシアン・ルーヴェン』）が何の価値もないのなら、一年の仕事が無駄になってしまう。ドミニックの回想録を書いた方がましだったのだ」²⁶⁾（ドミニックとはスタンダール自身が用いる自称のひとつ）という『リュシアン・ルーヴェン』の原稿余白に残されたノート（1835年5月14日）も、この小説と自伝が同列の問題設定の下で書かれていることを予想させると言えるだろう。

IV

スタンダールが父親に対する激しい敵意の情をもっていたことは事実で

24) 例えば生島遼一氏はそう推測している（人文書院版「スタンダール全集」、『アンリ・ブリュラルの生涯』解説 xix ページ）。

25) Cf. *Lucien Leuwen*, chap. VI et XXVI.

26) Cf. H. Martineau, *op. cit.*, p. 483.

あるが、冒頭にも述べたように、それが書かれるにあたってかなり意識的にエクリチュールのレヴェルでの操作が加えられていると考えられる。G・ジュネットの言葉を用いれば、それは明らかにひとつの「誇示」(parade)²⁷⁾であって、われわれが虚構と呼ぶのはまさにそうした意識的戦術なのである。「それはとても好感のもてるとはいいがたい男で、いつも地所の売買のことばかり考え、極端にずるく、百姓との取引きに慣れた超ドフィネ人であった。この魂ほどスペイン的なところが少なく、また狂人じみた高貴さの少ないものは何ひとつとしてない。だから彼は大伯母エリザベットに反感をもっていた。さらに彼はひどく皺がよっていて醜くかった。そして女のまえではうろたえておとなしくしていたが、しかし彼には女が必要だったのだ。」²⁸⁾ 父についてなされるこうしたある程度まとまった記述は、小説作品中の端役を描く際に冴える彼のレアリスト的な筆が感じられるし、また「恐らく偶然が私の父と私ほどに根本的に反感をもった二者を引合せたことはかつてなかったにちがいない」²⁹⁾という時、父と子の対立関係を展開するためにいかにもものものしく書きたてられてるように思われるのである。そしてこの父に対する敵対意識は、宗教への反抗、さらには王政への反抗へと、巧妙かつ着実に、しかも少なからず図式的に展開されてゆく。「私は反抗した。四歳ぐらいだっただろう。私の宗教に対する嫌悪はこの時期に始まる。(…)この嫌悪とほとんど同時に誕生したのが共和制に対する本能的な、親に対するような愛であり、この時代に激しいものだった。私は五歳を越えてはいなかった。」³⁰⁾ 本来あるべき親に対する本能的な愛は父親には向けられず、五歳に満たない少年にはあまりにも唐突ではあるが、共和制に向けられているのである。そしてこの反抗の展開の筋道が小説作品における主人公達に通底する基本的パターンであることは付け加えるま

27) G. Genette, *op. cit.*, p. 157.

28) *Vie de Henry Brulard*, pp. 595-596.

29) *Ibid.*, p. 597.

30) *Ibid.*, p. 552.

でもないだろう。

さらに父への反抗を核として、容易に見分けることのできる、互いに三者より成る陣営がいかにも小説構成的に配置されている。言うまでもなく、ひとつは父シェリュバン、叔母セラフィー、ライヤヌ師より成る陣営であり、他は少年アンリ、母アンリエット、祖父アンリの三者によって構成されるそれである。スタンダールの小説世界において三者よりなる関係は数多く見出され、それぞれ小説展開上有機的な機能を与えられているのは一読すれば了解されるが、その雛型を自伝において自ら形成しているのである。前者の陣営は少年アンリを威圧するいわば三頭政治であり、後者は少年の安息の場としての聖家族、あるいは三位一体のアナロジーとして捉えることができる。³¹⁾ 加えてこの三者はそれぞれの間でこれまたある種の三者関係として極めて小説的に設定される場合をいくつか構成している。例えば、父シェリュバン＝叔母セラフィー対少年アンリの三者関係。——「その後父は彼女（セラフィー）に恋をしたと私は思っている。少なくとも町の城壁の下の湿地にあるグランジュに長い時間の散歩をし、その時私はひとりのうるさい第三者でひどく退屈した。私はこの散歩に出かけるときに姿を隠したものだ。私が父に抱いていたごく僅かな愛情がここで難破した。」³²⁾「母の死後一年たって、1791年か92年頃、いまになって私にはそう思えるのだが、父は彼女（セラフィー）に恋するようになった。そこからグランジュへのいつやむともない散歩が始まり、その際私を第三者として連れていったが、私たちがボンヌ門をすぎるとすぐ私を四十歩さきに歩かせるように用心していた。このセラフィー叔母は、なぜか知らぬが私を憎悪していて、たえず父に私を叱らせるようにした。私は彼らを憎悪していた（...）。」³³⁾ 邪

31) このような聖家族を思わせる三者関係は例えばサルトルの自伝においても暗示されていて興味深い。「彼（祖父）は父なる神にひどく似ていたので、しばしば神と間違えられた。」（*Les Mots*, p. 14.）「若い娘はひとりで眠り、清らかな体で目覚める。（...）私が彼女から生まれたことなどどうして考えられよう。」（*Ibid.*, p. 13.）

32) *Vie de Henry Brulard*, p. 552.

33) *Ibid.*, p. 610.

魔者扱いされる第三者、いわゆる *terzo incomode* のテーマについては、ここで詳しく検討する暇はないが、レナール氏、レナール夫人、ジュリアンの関係にも、サンセヴェリーナ、モスカ、ファプリスの関係にも明らかに投影されているだろう。さらに自身を主人公とする三者関係は少年アンリがパリに向けて立つときの場合で三たび繰返され強調される。「彼（父）は少し泣いていた。その涙が私に与えた印象は、父がたいへん醜くみえたということだけだ。もし読者が私をいとわしく思われるならば、私を楽しませるために無理やり連れていかれたセラフィー叔母と一緒に数知れぬグランジュへの散歩のことを思い出していただきたい。ああした偽善がもつとも私を焦立たせ、私にこの悪徳を憎悪させたのである。」³⁴⁾ さらに父シェリュバン＝ライヤヌ師対少年アンリの三者関係。これについては今さら繰返すまでもないだろう（「彼ら（父とライヤヌ）は毒害という言葉のもつあらゆる激しさにおいて私の少年時代を毒した。」³⁵⁾）。少年アンリ、母アンリエット、祖父アンリ・ガニョンの、同音系列の名で結ばれたこれら三者の関係の緊密さもいささか小説的に描かれている。——「彼（祖父）は世の中でこの娘（母）と私しか愛していなかった。」³⁶⁾ 「第二の悲劇的な出来事は、母と祖父とのあいだで私が椅子の角に倒れて前歯を二本折ったことである。善良な祖父は驚きからさめることができなかった。『母親と私とのあいだで！』と彼は宿命の力を嘆くかのように繰返した。」³⁷⁾ さらにつけ加えるならば、祖父ガニョンにいやな思いをさせ彼を困らせるセラフィー、³⁸⁾ ただ深い苦悩の感情によってしか結ばれていない祖父と父。³⁹⁾ 少年アンリ、母、父シェリュバンの三者関係については、スタンダールに《エディプス》を適用する際に必ずその典型例として引用される箇所を思い起こせ

34) *Ibid.*, p. 869.

35) *Ibid.*, p. 615.

36) *Ibid.*, p. 591.

37) *Ibid.*, p. 578.

38) *Ibid.*, p. 591.

39) *Ibid.*, p. 598.

ば十分だろう。⁴⁰⁾

V

上のいくつかの例は、そこにあらわれるスタンダールに特有のテーマを抽出するために、あるいは『アンリ・ブリュラル』を自伝的資料とみなして小説作品における登場人物たちの間に繰広ろげられる関係との相同性を論じる目的で挙げたのではない。逆にそこにあらわれる父を中心とする人間関係のあり方、すなわち対立関係の描き方が極めて図式的かつ意図的になされていること、すなわち一言で言えば小説的であることを示すためである。ここに描かれたひとつひとつの出来事、周囲の人間に対する少年アンリの感情はおそらく真実であろう。われわれがいまここで問題としているのは、そうした真実性ではなくて、その真実の表出の仕方なのであって、そこにこそ、完全なフィクションにも似た小説的効果を読みとり得るのである。先にも述べたように、実際にスタンダールが抱いていた父シェリュバンへの感情は、『アンリ・ブリュラル』におけるほど激しい嫌悪ではなかった。それは妹ポーリーヌに宛てた手紙からも容易に読みとれることだが、⁴¹⁾ このズレについて、例えばB.ディディエは次のように述べている。「(...) 父との葛藤は、多くの短編あるいは長編小説におけるように自伝においても、語りの上でのある必要性としてあらわれる。この必要性が、主人公が家の監房から遠くへ出発し、己れを未来へと投影すること

40) Cf. *Ibid.*, p. 556. また p. 653. 「私に私の母の話をしながら、ある日、大伯母はふと、母は私の父にたいして少しも好意をもっていなかったのだともらした。この言葉は私にはひどくこたえた。そのころでも、心の奥底で私は父に嫉妬を感じていたのだ。私はこの言葉をマリオンに話しにいったが、彼女は私の母が結婚したころ、つまり1780年ごろ、ある日ご機嫌をとろうとする私の父に母は、『ほっておいてちょうだい。いやらしいひとね (villain laid)。』と言ったという話を聞かせて、私を満足させた。」

41) *Correspondance*, t. I, 《Bibliothèque de la Pléiade》, Gallimard, 1968, p. 12, p. 49, pp. 67-68.

を説明している。是が非でもグルノーブルを去らねばならないのは父が忌まわしいからだ。従って、レシが最大限の強度と弾みを獲得するためにはどうしても父はそうあらねばならないのである。」⁴²⁾ すなわち、『アンリ・ブリュラル』に窺える父親対息子の対立は、心理的事実としてあったと同時に、レシ自体が必要とする対立、エクリチュールが産みだす対立でもあるのだ。レシが進行するためには、父と息子の関係はこうあらねばならないのであって、これまで論じてきた非事實的虚構化とは、こうしたエクリチュールのレヴェルにおける必要性に基づくひとつの操作であると言えるだろう。

スタンダールの小説空間に大きく位置を占める父と子のテーマの基本的原像を自伝『アンリ・ブリュラル』に求めて理解しようとするのは間違っていない。けれども同時に重要なのは、これまで論じてきたように、自伝における父と子の関係がすでにその書き方のレヴェルにおいてある程度の小説化を蒙っているということである。父と子のあり方のいくつかの形態をいわば実験的に小説に与えることによって、自身にとって根源的なこの問題を問うスタンダール⁴³⁾は、『アンリ・ブリュラル』によって、すなわち自分自身の「真実」をもとにして実験的に自己を再創造しているようにみえる。自らの《エディプス》的状況をあまりに露骨に、かつ図式的に誇示することによって、《エディプス》を適用することを拒むエゴチスムのパラドックス——このエゴチスムの中に『アンリ・ブリュラル』のある小説的虚構性を見いだすことは意味のないことではない。小説を書くことによって、反対に自伝の真実の中へと逆流するもの——この自伝の著者はもはや『エゴチスムの回想』という自伝的著作を書いたスタンダールである以上に、『赤と黒』や『リュシアン・ルーヴェン』を書いたあとの

42) Béatrice Didier, *Stendhal autobiographe*, P.U.F., 1983, p. 44 .

43) 小説における父と子に関する分析は、Ph. Berthier, *Stendhal et la sainte famille* の、とくに第二章を参照のこと。

スタンダードである——を忘れてはならない。父をめぐるエクリチュールをみる時、『アンリ・ブリュラー』は他の小説の原因であると同時に結果でもあるのである。自伝の事實的「真実」のあいだに忍び込むエクリチュールの虚構性。自伝を独立した文学として読むためには何よりもまず、このエクリチュールの虚構性を読みとる必要がある。

(本学非常勤講師)